作東の文化

No.
45

作東文化協会

作東の文化

No.45

洋画　妹尾美智子

令和元年10月

題字

真野みよ子

表紙写真

題　「　文人華　」

中　田　敏　甫

表　紙　説　明

題　「文人華」宣男多子

花材　柘榴(ざくろ)・萱草(かんぞう)

花器　嵯峨好「鳳玉」

今朝(7 月 6 日)萱草の花が三輪咲きました。

我が家の庭の柘榴と萱草を使って文人華にしました。

りっぱな男の子が多く生まれることを願った題意です。

目　次

巻頭言
土居駅まで……春名貞和……1

特別寄稿
愉悦の大伴旅人か……横山　猛……3

所感寸言
気になる日本語――敬語の使われ方　内藤善晴……6
もう一度……岩本全子……7
作州俳人・阿部青鞋（あべせいあい）について　山下　亨……8

随筆随想
我が人生二度目のターニングポイント　安東公一……11
自動車タイムマシン……井上健一……12
八十の手習い……井口祥子……14
ツバメの子育て……浅田年史……15

歴史紀行
旅行はゆったりが一番？……鳥形初美……18
また、視察旅行記……山本進一郎……22
鷺神社・亥の子について……加藤芳英　春名倫子……23

短文芸
俳　句
蓬（よもぎ）……山本真由美……27
里の四季……堀江二郎……27
生……山本邦実……28
鈴の音……春名はるを……28
四季の詩……青山美和子……28
青田風……井口祥子……28
草の名……沖田はるみ……29
平成の終わりに惜む……杉本幸子……29
雲……高橋ヤエ子……29
夏の空……樽井悦子……30
里の春……豊田絢子……30
若葉……春名静山……30
一八……坂井はつ子……30
さゝ舟……尾崎千里……31

夕　立……樽井清江……31
四季折々……山本靖子……31
【詩】月……鳥形初美……32

川柳

仕　事……春名静山……33

短歌

能登香の里に住みて……名部みどり……34
米寿を生きて……野澤老梅……34
令和となりても……安西　苑……35
青葉風……井上さかえ……35
令和元年……内藤慶子……35
昭和への想ひ……藤本伸子……35
年明け手……大内佐知……36
古里を懐ふ……松井洋子……36
春……坂井はつ子……36
わが望み……宅美とみ子……37
同級生……中村千州代……37
幸　せ……平瀬芳子……37
宝なる子供……渋谷友香……37
日々好日……岡田仍子……38
孫　達……土井つゆ子……38
村の宝……有元理嘉子……39
老いてなほ……角　利津……39
浜　菊……豊田絢子……39
バイアムをかぐ……長澤和枝……39
東京の嫁……中山昌子……40
戌　年……小林洋子……40
五体が目覚む……和田美佐子……40
狸や踊らむ……山本美枝子……41
「生きててよかった」……新田千晶……41
改　元……黒石和江……41
光……日下智加枝……41
春……浜田くに子……42
風……入矢敏枝……42
逃げ水……福島美智子……43
メガソーラー……末宗玲子……43
孫の春……新田みどり……43
夫の顔……立野道子……44
育てて育つ……山下照夫……44
負けるな……杉本幸子……44

雲……佐々木美奈子……45
思ひのままに……須田紀枝……45
春こそ……春名倫子……45
初夏……三浦智江子……46
令和の御世こそ……関内惇……46
作東文化協会グループ紹介……47
平成30年度　作東文化協会事業報告……51
平成30年度　作東文化協会決算報告……55
作東文化協会会則……57
令和元年度　作東文化協会会員・役員名簿……59
編集後記……69

生花　樽井悦甫

〔巻頭言〕 土居駅まで

会長　春名貞和

タクシーが遠出していて、いつ乗れるかわからないので土居駅まで歩いてみることにした。駅までは自宅から四キロメートル弱である。何十年ぶりであろうか、この道を歩くのは。現在の道はとてもよく整備されているが、私は思い切って、少年時代に通っていた旧道を白水川に沿って歩いた。旧道とは中国自然歩道に指定されている道のことである。

歩いているとその頃の事が懐かしく思い出されてくる。学校の帰りには白水川で魚とりに夢中だった。フナ、キモツ、ドジョウ、その他の川魚がたくさんいて、岩の下に手を入れると、魚の感触が指に伝わり、嬉しかった。少し歩くと白水川と山家川が落ち合う。近くに「わんわん嶽（だけ）」がある。そこの岩を砕くと「ろう石」が出てくる。その石で線や絵を描くと、白い色がつく。友達と、より濃い白が出る石を見つける競争もした。別所から山家川に抜ける所が坂道になっている。頂上付近が恰好の遊び場だった。秋には栗を拾ったりあけびを採ったりして楽しく遊べた。この峠道は今でも自然の山道である。落ち葉が積み重なっていて、とてもクッションがよい。以前は小さかった木々も大きくなり、辺りは鬱蒼（うっそう）としていた。山家川の橋を渡り土居神社方へ足をのばす。中学時代は細い道だった。英単語のカードを暗記しながら通った道でもある。そ

のうちに土居駅に着いた。四十三分かかった。土居は出雲街道の宿場町である。駅前には案内板があり往復時の面影を偲ばせてくれる。気動車のライトがせまって来る。乗客は少なく、高校時代の活気のあった車両の面影は見られない。

昨今は学校や地域での子供の生活に、ゆとりとか、おおらかさがなくなっているように思える。のんびりと少年時代に歩いた道でそう思った。自省にもなるが、子どもたちに、「早く計算しなさい」「早く食べなさい」「早く起きなさい」「早く帰りなさい」ではどうかと思う。指導者やこどもを取り巻く環境にいる大人は、もう少し「待つ」という「待ちの子育て」が肝要ではないだろうか。

提言として、的を射た思いには遠いが、次に述べる側面も子どもたちの育ちの一助として、きり込んでみたい。

すなはち、地域に密着し、自然の素晴らしさ、温かさを学びとっていく発想を強め実践していくことを、衆知を結集して考えてみたい。基本的には自然に子どもを放ち、自然とふれあう中で「たくましさ」と「やさしさ」を持つ子供像。自然に接することによって「おどろき」や探求心のある子ども像。自然に接することによって「おどろき」や探求心のある子ども像。自然の恩恵に感謝し、自然と共に歩む子ども像。自然の動植物を愛する子ども像等が考えられる。

これからの教育には心の教育の充実が大きなウエイトを占めるだろう。市においても、自然環境の調査と整備をさらにすすめ危機管理にも配慮した取り組みを強めることによって、ふれあいの心、豊かな心、福祉の心、自分自身を真剣に見つめる心等の充実に、自然の「仲立ち」が「子育て」にプラスするのではないかと愚考してみた。

特別寄稿

愉悦の大伴旅人か

特別顧問　横山　猛（歌人）

大伴氏は「天孫降臨」神話に登場し、神武伝承では、東征に際して登場する。しかし、実在した人物を考える場合は、充恭十一年（一四二二）紀の、大伴室屋あたりとすべきであるとする川口常孝氏の説によると、旅人はその六代目となり、極めて古くから朝廷に仕えてきた。重臣の末裔である。しかし、天皇家に己の娘を嫁がせたという記録はない。

一方、中臣氏は天児屋根命末裔と言われ、朝廷の祭祀を担当していたが、大化元年（六四五）、中大兄皇子（後の藤原鎌足）らが、曽我大臣家を滅ぼして、大化改新を成し遂げた功績により、藤原氏を名告って政治の中枢を担ってゆくようになるのである。（中臣氏は祭祀担当）。そして、鎌足の息子の不比等になると、娘の光明子を西武天皇の皇后とし、生まれた娘を考謙天皇とするなど、政治の実権を握ってゆくのである。

このような状況下で、藤原氏から見れば大伴氏は邪魔物になるからであろう、旅人は神亀四年（七二七）に大宰師として太宰府に追いやられたのである。しかもその翌年には、愛妻が亡くなってしまい、傷心の旅人は次のような歌を詠んでいる。

世の中は空しきものと知る時しいよよますます悲しかりけり

ますらをとおもへる吾や水茎の水城（みずき）の上に涙拭（のご）はむ

沫雪のほどろほどろに降り敷けば奈良の都し思ほゆるかも

このような心境の中で天平二年（七三〇）正月十三日、師の宅に集まって宴を開いたその時の梅花の歌三十二首が万葉集に載っている、その序文の一部分は次の通りである。

梅花歌卅二首幷レ序

天平二年正月十三日、萃二于師老之宅一申二宴会一也。于レ時、初春令月、気淑風和―以下略―　（・は筆者が付けた）

皆さんもすでに御承知のように、新元号「令和」はこの序文から生まれたと言われている。旅人が宴を開いてから約千三百後に、新元号として採用されたのである。

旅人はこの宴のおり〝わが園に梅の花散るひさかたの天（あめ）よ

り雪の流れ来るかも〟（巻五〜八二二）と詠んでいる。まさに、天から寿ぐ雪が流れて来るように、新元号「令和」が下りて来たのであるから、旅人はきっと、天国で愉悦の感に浸っていることであろう。

さて、今年も去る四月十一日に、第八回文芸愛の小径短歌大会を開催した。但し、新しく開催されるようになった「美作市民文学選奨」の妨げになってはいけないと思い、今回を最後の大会とした。題は「結」。選者賞（〇）結び賞（※）は次の通りである。

○結論は据ゑ置かれたり各々の意見は泡や欠欠となりて
松井洋子（能登香）

○糸も古り結び目弛むかわが裡の突つ支ひ棒は揺らぎて来をり
新田千晶（吉野）

○十九にて結婚せしわれ農一筋梅の花咲きて金婚迎ふる
片山恵子（鶴山）

○セピア色の写真を見つつ亡き夫と結ばれし縁（えにし）の不思議を想ふ
苅田順子（赤坂）

○学びあふ歌に結ばれ師を囲む「愛の小径」やさくら散りゆく
田村敬子（林野）

○夫逝きて事あるごとにわが裡を結び直して二十余年生
和田眞佐子（林野）

○生涯の結びの書作に選りたるは響きやさしきふるさとの歌
角利津（英北）

○夫と吾（あ）のえにしを結べる糸車廻り廻りて七十年ぞ
豊福恭子（英田）

○結願は厳かに来ておごそかに去り行くものか消えゆくものか
坂井はつ子（三河）

○君が許へ奇しき縁（えにし）に結ばれて五十余年の月日重ね来
中村千州代（三河）

※また忘れたのかと教へてくれる友男結びの出来ぬ私に
羽原清子（赤坂）

※友のわを広く持てよと名付けたる友結（ゆい）ちゃんこの春十七歳に
浜村真佐子（千里）

※月毎に参りて頂く「ご神米」子らに送りて家族を結ぶ
小川律子（赤北）

※恒例の一族の集ひ「結び会」今年は曾孫も初顔合はせよ
小林智恵子（勝田）

所感寸言

感想や批評を文章で表現する
簡単そうで難しい
しかし文章化されることで
新たな感想や批評が生まれる

洋画　原　田　照　子

気になる日本語——敬語の使われ方

内藤善晴

日本語の特徴というか、「らしさ」というか、他国語との違いについて、「日本語は敬語表現が豊かである」というふうに言われる。

例えば、「見る」という言葉を遣う時、①ご覧になる、②拝見する、③見ます、というような敬語表現がある。①は、話し相手の人を尊敬して遣う言葉遣いで、「尊敬語」、②は、動作する側、話し相手の立場を低くすることで動作を受ける側、聞き手に対して敬意を表す言葉遣いで、「謙譲語」③は、です。ますなどを遣って丁寧に表現する「丁寧語」と言われている。

もともとは、身分の上下関係をはっきりつけてきた封建時代の遺産だろうと思われる。時代劇などで、「苦しゅうない、近う参れ」「何を申すか」などと、相手の動作に謙譲語を遣ったりしているが、今ではお互いの人権を尊重しあって、円滑な人間関係を保つのに役立ってきている。

「言う」という動作を表すのに、謙譲語は「申す」「申し上げる」、丁寧語は「言います」。「行く」とか「来る」とかいう動作を表すのに「いらっしゃる・おいでになる・行かれる・来られる」「参る・伺う」、「行きます・来ます」等々。大多数の人たちは、この敬語表現を正しく使いこなしてきているように思われる。

そういう中で、国会中継などで気になる言葉遣いがある。「おっしゃられる」という言葉遣いがそれで、二重敬語表現が遣われている点である。「おっしゃる・おっしゃった・言われた・お話になった」というので結構すっきりした敬語表現になっているのではないだろうか。

また、「〜と考えてございます」「〜と確信してございます」「〜と申し上げてございます」などという答弁の丁寧表現も気になっている。「ございます」は「います」で、すっきりした方がいいのでは？

皆さんは、気になりませんか。

もう一度

岩本全子

六月十五日今年も月見草の花が美しく咲いた。いつも天国から心配して見守っているのでしょう！家の前横裏山にも夕方になるとポッポッと音がする。今年ももう半分が過ぎました。

四月九日津山のアルネで孫の悠香が「美作の若き音楽家によるコンサート」に出演する事になり私の友達妹たちにもお願いして応援していただきました。澄みきったユーフォニアムの音色に神秘的な音の世界に引きこまれていきました。まだ大阪音大に在学中ですが皆様のおかげで故里の地津山で演奏出来て光栄に思いました。ピンク色のドレスで全精神を打ちこんでいる姿に、涙が出ました。まだまだ頑張ってほしいものです。

大阪といえば私にとって忘れられない場所です。結婚して新しい人生を送り始めた地です。まさか大阪で暮らすなんて思ってもいませんでした。楽しい人生のページが始まりました。子供が大きくなったので、また幼稚園に務めはじめて忙しい日々でしたが皆様のおかげで保育の世界で自分を見つめる事が出来て、私の人生にとって一番幸わせな時代でした。あのグランドで運動会がしたい、あのピアノ、エレクトーンが弾きたい。もう一度もう一度。元気な園児たちの顔が浮かんできます。きびしく、やさしいお父さん、お母さんになっている事でしょう。

四條畷神社も山の上にそびえていて、石段を登って行くのが大変でしたが、もう一度参ってみたいです。テレビの天気予報で生駒の山々が右にゆっくり動くのも日々楽しみの一つです。足に気をつけて一人で、四條畷に今年こそ行って楽しい過去に会ってきたいと考えています。

これからも健康に注意して楽しく強く生きて行きたいと思っています。

作州俳人・阿部青鞋（あべせいあい）について

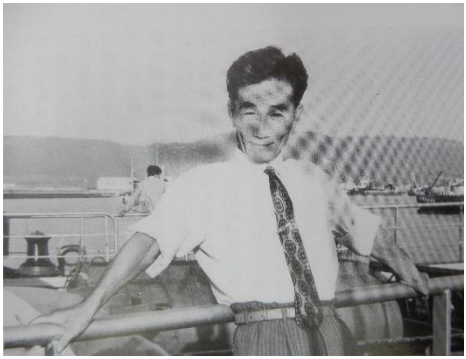
山下　亨（阿部青鞋研究会）

阿部青鞋（大正三～平成元）は、新興俳句界に新鮮な作風を展開した作州俳人で津山出身の西東三鬼と並ぶ逸材でした。縁あって美作の地に三十三年在住。『美作町史』には次のように紹介されています（一部省略）。

本名麗正（よしまさ）、号羽音。現在の東京都渋谷区の生まれ。新興俳句運動が隆盛の昭和十二年ころ俳句界に入り渡辺白泉らの句会・風に参加。『現代名俳句集』二巻を編集・刊行しました。同年日中戦争勃発とともに応召され中国に渡り、戦病のため帰還しています。太平洋戦争末期の十九年、知人の勧めで英田郡巨勢村（当時）尾谷に疎開し、その後同村海田に転居。海田では戦後帰郷した青年たちが東京の知識人・青鞋の為人（ひととなり）に惹かれて小さな家屋を建設・贈与。その家は羽庵（うあん）と命名され青年たちの集いの場となったのです。

同村役場に勤務した後、二十九年同村が美作町と合併すると、同町三倉田の長大寺に転居、三十五年まで同町社会教育主事を務めております。この間、句会・女像社を育成。三十八年には句誌『瓶』を創刊し独自の句風を確立。句集には『火門集』『続火門集』『ひとるたま』があります。五十八年夫人の病気治療のために東京都東村山市の次女宅に転居しました。ちなみに、青鞋の作詞・作曲した『海田茶摘み音頭』は海田や後楽園の茶祭り行事で歌われています。次に、筆者の好きな句を選んでみます。

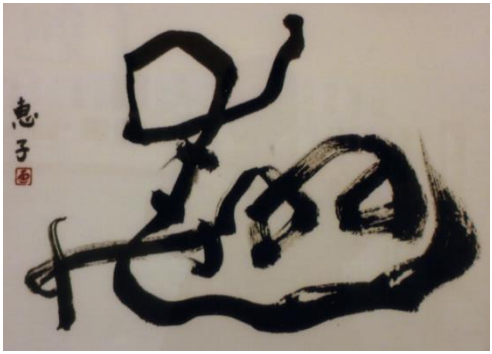
梟の目にいっぱいの月夜かな
金魚屋のなかの多くの水を見る
寒鯉やくちをむすんでひげ二つ
おんどりの笑われながら逃げにけり
夏ごころ敷居のあぜに指触るる
かたつむりいびきを立ててねむりけり
生活をしてをれば咲く八つ手かな



阿部青鞋(伊藤敬郎氏蔵)

句会や英語塾での教え子は八十代、九十代の齢を数えられていますが、筆者がお話を伺うと往時の海田、林野が燃え立つような新文芸社会であったことが分かります。青鞋の人柄、作風ともに素晴らしかったことはその教え子たちの活躍ぶりからもうかがえます。教え子の一人伊東音江女史の句は金子兜太に絶賛されており、また、同じ教え子の水嶋波津女史(初代美作町長の妻)の句は三島由紀夫の知るところとなり三島の紹介を受けた京都大学ボーナス教授が英訳し『ペンギンブックス』(世界の現代文学アンソロジー)に収載されております。

青鞋没後三十余年。教え子の方々が高齢になられてきた今、その顕彰が急がれます。



書道　長 尾 恵 子

随筆随想

折にふれて
感じたことや
見聞・体験を
なにくれとなく
書き綴る
思いのままに

平成31年春の文化展より
つまみ細工　溝 曽 路 寛 子

我が人生の二回目のターニング・ポイント

安東公一

我が人生の再スタートは、七十五歳の時、「わが青春に定年はなし」と意気込んでいた。趣味に生き、同年代の友はコーヒー・ブレイクに来てくれるし、「わが青春に悔いなし」と一人暮らしをまっしぐら生きてきた。オシャレして息子や、孫娘と外食したり、趣味の海外旅行をしたりして定年退職のない青春を生きてきた。

ところが、八十三歳になり状況が変わってきた。「自分の思い描いた通り生きていると願いが叶えられる」と思い頑張って生きていたのだが、体力的に強く減退を感じてはいたが、それ以上に、強く感じることは、我が家にコーヒー・ブレイクに来ていた人達（三人組の未亡人会や年齢の近い上下のコーヒー友達・四十代の生き生きしたひとたち）、週四日は来てくれていたのに、彼等がいたから生きてこられたのに…若い彼らは「八十代にしては随分感覚的に若い」などおだててくれるし、少し後輩の彼は「私は養子の為、親しくする人がいない、安東さんの生き方に惚れた、コーヒー友達にしてください。」など上手いってくれたりして、どんどん来客ができ楽しかったのに、それが最近急に変化が起きた。未亡人達は施設に入るし、同年齢の人達は突然・・サッサと旅だった。寂しい限りだ。

しかし、今残った人達とコーヒー・ブレイクをしながら、息子一家のやさしさに甘えながら生きている、でも、この年齢のひとり暮らしは厳しいものがある。でも身体の衰えは仕方がないが、気持ちのうえでは負けたくない。

だから、まさに今、我が人生の二回目ターニング・ポイントをむかえることになる。趣味の海外旅行も宮古島とか国内に切り替え、大相撲や歌舞伎やミュージカル等孫娘と行ったり、奈義のイタリアン・ピザの店ラ・ジータにオシャレしていったりしている。夜、寝たら六十代で行ったバリ島でケチャ（下は巻き布で上は裸の男達の踊り）を見ながら夜空で一段と輝く南十字星を見た時の感

動。美しかったこと。またある日はロスアンゼルスからバスで二時間砂漠の中を走りバームスプリングスに行く、四十度の砂漠の中でゴルフをする。砂漠の中のゴルフ場だけはきれいなグリーン。地下水で育てているそうだ。ホテルに帰り友とプールで泳ぐ、はるか先の高い山を見ると山頂には雪ではないか。感動した。

またある時はモンマルトルの丘を降り、ムーランルージュに生き、カンカン踊りの始まる前の舞台に妻と上がりジルバを踊り仲間達のかっさいをうける。など思い出を夢に見るとあくる朝の寝起きがまことにさわやかなこと…

一番に云わなければいけないこと忘れてた。今一番私を慰めてくれているのは、ジミーである。朝夕散歩するとき迎えに来てくれて、玄関で待ってくれる。ジミーとは、単身赴任で岡山のマンション住まいをしていて妻が「独り住まいは寂しい」と言うので買ってやった、チワワ犬である。今は妻亡き後、会社も引退して一人暮らしの今、夜はベッドルームに挨拶に来てくれる時の可愛さは何とも言えない。

お陰で、「定年のない青春」を楽しんでいる。

自動車タイムマシン

井上 健一

令和の時代を迎えた五月一日にテレビを見ていると、新天皇、新皇后の両陛下が立派な車で往来されている姿が映し出されている。良く見ると、トヨタのセンチュリーのようだ。

以前は、日産に統合される前にプリンスが製造したプリンスロイヤルだった。センチュリーも安全を第一考えると、ロイヤル仕様になっているはずだ。

今回は昭和の時代から自動車はどのような進化を続けたのかについて、書きこんでみようと思う。

私が免許を取得した頃の自動車は、奇抜なモデルが多かった。軽四では、スバル、キャロル、フロンテ、ミニカ等小型乗用車部門では、フェアレディ、スカイライン、Ｓ８００、２０００ＧＴ、コスモスポーツ等である。

注目は殆どの自動車が、クラッチ付きのマニュアルチェンジの自動車だった。若者向けの自動車ばかりではなく、大衆車部門でも殆どがマニュアルだった。最近のニュースで数多くのアクセルとブレーキの踏み間違いにより、急発進による事故が、報道されている。その多くが六十五歳以上の高齢者と言う事なので、免許制度の改革を論議されているそうだが、それだけが原因なのだろうか？免許を取得した時点からマニュアル慣れをしているので、最近増加したオートマチック車に体が順応しにくい事も大きな原因ではないかと思う。

話は戻るが、昭和四十九年に入ると公害の影響でガソリンの無鉛化が始まった。エンジンのバルブを冷やす為にガソリンに混入していた鉛を抜かざるをえなくなったのだ。

公害防止の処置としての法律が施行されたためだったが、当時の自動車関連の会社は大騒動だった。鉛を抜いたのは当時の触媒を使用したマフラーの腐食を避ける為でもあった。その当時には枯草や燃えやすい物の上に自動車を止めると触媒の熱で火災になる事もあった。

無鉛化の後にも数年は有鉛ガソリンも販売されていたが、若者のあこがれの的だった奇抜な姿の自動車も殆ど姿を消してしまった。高齢者の免許制度だけにこだわらず安全とは何かをもう一度考え直してほしいものだ。

八十の手習い

井口祥子

この年になって、体は思うように動かなくなっていくのに、好奇心のみが先にたち、やってみようとする心が、やたらと起きてくる。

一つは、介護予防サポーターの勉強で、健康を維持するために、運動することの基本が習いたかったのである。

もう一つは、パソコン教室へ通って少しずつパソコンをポツポツと打つ勉強である。

一つ目の介護予防サポーターの勉強会は五月十五日から行われた講習で、八回にわたり環境改善センターへ通って宇野園恵先生はじめ高齢者福祉課の保健師の方々の指導を受けることである。九時半から十一時半までみっちり運動メニューを習う。ストレッチ、筋力トレーニング、ロープを使った運動　、リズム運動等々声を張り上げて、一、二，三、四、とゆっくり数を唱えながら拍子をとり体を動かす、共に学ぶ仲間とグループになり、ロールプレーをしたことも楽しく色々と意見をかわす。七月三日を最後に講習が終わり、地域に帰って月に二回公会堂に九時半に集まり、地域の人と共に体操を始めた。美作市には、介護予防サポーターの方が百人以上おられるとか、先輩の方々の実践を見習いながら、いきいきサロンがより楽しいものになるよう励みたい。

二つ目は、パソコン教室の挑戦である。月に四時間で四回に分けて教室に通いワードの教本に従って学習している。用語の分からないところがあったり理解に苦しむことが多々ある中で指導にあたって下さる先生にわからないところをたずねると，「索引で分からない項目を調べたらいいですよ。」と言われるストレートに「こうしたら。」と指示してもらうことを期待しているのであるが、自分で調べて、「あっそうか。」と納得し、自分でもできるんだと、うれしくなってくる。やりだしたら一生懸命パソコンに向かい合い、まわりが見えないけれど顔を合わせている人達と徐々に友達となり会話することもできるようになった。

八十の手習いは遅々として進まないけれど一喜一憂の日々である。

ツバメの子育て

浅田年史

「ちょっと来てみて、お父ちゃん、ツバメが近くで雛を見守っとるで」

夕食後、妻が興奮した様子で言うので懐中電灯を持って軒先へ行ってみると確かにツバメが巣から一メートルほど離れた場所で止まっています。

「すごいじゃろう。ツバメの父親はなあ。毎日近くで母ツバメや雛を見守っとんじゃで」

私は信じられなくて、次の日も次の日も軒先に行って本当かどうか観察しました。確かにいます。

母ツバメが雛たちに向かって何やら話しているように見えます。雛も大きく育ち、もうすぐ巣立ちそうです。

次の朝、散歩に出かけようとしてるとにぎやかに私の頭上を旋回しているツバメを見かけました。

「みて、みて上手に飛べるでしょ」と言っているように私には聞こえます。昨日見た雛が巣立ちしていったのだろうか。親ツバメもさぞ安心したであろう。巣立った後のツバメ夫婦はどうしているだろうかと思い、私たちはいつものように巣を見にいきました。

どうしたことでしょう。巣の中に一羽雛が残っています。その近くには母ツバメが何やら話しています。このツバメは飛び立ちそうで飛び立ちません。私と妻は、ちょっと怖がりじゃないか、太りすぎなのかな、などと話しながら見ていましたが、一向に飛び立つ気配はありません。

「みんな飛び立ったのよ。もうあなただけよ。怖くないから　勇気を出して飛び立ちなさい」

「ぼく怖いよー」

ツバメの言葉が分かるという妻はこんな風に通訳してくれました。相

ちぎり絵　影本昭子

変わらず一メートルほど離れたところに父ツバメは止まっています。

数日後、庭の周りを何やらにぎやかに鳴きながら旋回する七羽のツバメを見かけました。その中にぎこちない飛び方をしている少し太ったツバメが目に入りました。

巣の中を見ると空っぽです。恐がりツバメもみなと一緒に飛び立ったのです。ツバメの子育てを人間も見習わにゃあ行けんな、と話しながらツバメたちが旋回する様子をしばらく眺めていました。

写真　小 坂 田 貢

歴史紀行

大きなできごと
些細な歩み
みな
人間の歴史

かたりべとなって
伝えよう

写真　山 本 眞 人

旅行はゆったりが一番？

鳥形初美

粟井支部では二年に一度、研修旅行を実施しています。評議員会で行先の候補を数か所提案してもらい、地元の観光会社にお願いして、見学コースを考えてもらいます。参加者は比較的ご年配が多いことなどから、見学するところも限られ、日帰りとなるとコースの選定も難しいのですが、条件に見合ったコースを提案してくれます。今回は評議員から姫路の美術館へ！との声があり、観光会社にお願いしたところ、御座候・あずきミュージアム・灘菊酒造・圓山記念日本工藝美術館・ヤマサ蒲鉾・揖保乃糸資料館『そうめんの里』というコースを提案していただきました。姫路の美術館と言うと姫路市立美術館がよく知られていますが、残念ながら姫路市立美術館はリニューアルのため休館になっていました。しかし別の美術館を探して私たちの要望に応えたコースを考えてくださったようです。

〝圓山記念『日本工藝美術館』〟は漆工芸など日本独特の工芸について研究、技や精神の保存、継承、発展のために収集展示しているそうです。ただ作品が並んでいるだけの美術館ではなく、道具など触れるものもあり、新鮮な楽しさがありました。参加者からも、

「姫路…とはいえ、はじめてのところばかり。特に工芸館はとてもすがすがしくよかったです。遠くに行かなくても近くでゆったりもよい企画だったと思いました。」

「どこもゆっくり見学できてよかったです。工芸美術館が特に気に入りました。生でびわの音が聞けました。」

「美術館などなかなか行けないのできれいな漆器を見れてよかったです。また参加したいです。」

「園山記念日本工芸美術館は初めてだったが、珍しい貴重なものに出会えてよかった。」

などの感想がありました。

姫路といえば『御座候』の名前で知られる「回転焼き」を思い浮かべませんか？回転焼きは「今川焼」「大判焼き」など各地方いろいろな名称でおなじみのお菓子ですが、『御座候』は「お買い上げいただきありがたく

御座候」という感謝の意が込められているそうです。まずは工場見学。工場内は、あずきから餡になるまでがほぼ自動で動いていました。白餡の方が好きな私だけど白は全体の二割ほどだそうです。世の中みんなあずき餡のファンなのですねぇ。あずきは魔除けって言われてるし、古くから暮らしに根付いた食品だからなのでしょうか。そして御座候に焼き上げるのは全て手作りです。工場に併設されているのが「あずきミュージアム」。あずきの種類、あずきのルーツ、祖先種や栽培種など、あずきについていろいろ知ることができました。世界中であずきを一番たくさん食べているのは日本人みたいですよ。

その後、私たちは「灘菊酒造㈱」へ。お酒について解説を聞きながら酒蔵の見学をした後、昼食をいただきました。テーブルに着くと雰囲気のあるお品書きが…。

「ゆったりと見学をいろいろさせてもらい、食事もたいへんごちそうで満腹です。心配していた体も調子よく楽しい一日でした。」

「天気もよく楽しい一日でした。お昼御飯が得においしかったです。近場でしたが、行ったことのないところばかりで新鮮でした。」

「いろいろ勉強にもなったし、いっぱい試食も食べおいしかったで

す」
「お昼がごちそうだった。みやげもたくさん買えてよかった。」
「お昼のご飯もおいしくいただきました。」
「試飲試食もたっぷりさせていただきました。」
と、思った以上に豪華な食事でみんなとても満足しました。食後はお酒の試飲もあり、お気に入りのお酒がみつかった人はお土産に購入することもできました。私は板状の酒粕を買って帰りましたが、スーパーで購入するものより数段おいしくて、もっと買って帰ればよかったと後悔しきり。少し焦げ目がつくくらいに焼いて、熱いうちにとろけるチーズを乗せて食べるのが大好き！
　姫路といえばもうひとつ。『揖保乃糸』は言わずと知れたブランドそうめん。〝揖保乃糸資料館『そうめんの里』〟に行きました。入口でそうめんについて説明を聞き、手延べされたそうめんに触ってみるなどの体験もできました。意外な触り心地を感じた人もいたかもしれません。資料館ではそうめんの今昔など、古くからの様子が展示してありました。旅行は夏をとうにすぎた晩秋でしたが、日本の夏はそうめんだな～と感じたひと時でした。
　「ヤマサ蒲鉾」では工場見学はできなかったものの、種類豊富な蒲鉾は見るだけでも楽しめました。珍しいものもあり、お土産にたくさん購入した人もいたようです。
　姫路という近場での今回の研修旅行は、工場見学、芸術鑑賞、歴史の再確認など、多くが盛り込まれていたにもかかわらず、ゆったりとしたスケジュールで往復することができました。車中楽しく行きたいと考えたクイズも盛り上げてもらえ、少しうれしい気分を味わいました。
「どの研修も時間的にゆったりして楽しく見させていただきました。」
「朝のクイズもとてもよかったです。時間的にもこのくらいがよいです。」
「朝の時間もゆっくりしていて楽しい旅行でした。」
「楽しかったです。近場でいろいろ行けたのがよかったです。」
など、余裕のスケジュールを喜んでいただきました。
また、
「中国道が開通以前の昔、大阪に就職していたころ、姫路駅を通るたびに駅の立ち食いソバを食べて、御座候をみやげに買ったのをなつかしく思い出しました。姫路の様子も変わ

りました。」

「天気もよく楽しいツアーでした。もみじも美しかったし、料理もおいしかったです。」

など、風景や街の様子を楽しまれた人もいたようです。

他にも、

「どこもはじめてのところだったのでよかったです。何をするのも大変苦労なことで感心するばかりでした。勉強になりました。」

「初めて参加しました、いろいろなところに行き楽しかったです。」

「それぞれの会場は知らないことが多く有意義な日を過ごせました。」

「工場見学ができてよかった。いろいろなところへ行けてよかった。」

『ヤマサ蒲鉾』の味み、揖保乃糸資料館『そうめんの里』もよかった。」

「一日でいろいろ見学させてもらいありがとうございました。土産もたくさん買えて楽しい一日でした。またこのような身近な旅行企画してください。」

と、たくさんの感想をいただきました。総勢26名、研修はもちろん、とても楽しく、おいしく、満足できた旅行となりました。

※参加者アンケートより感想を抜粋しました。ご協力ありがとうございました。

また、視察旅行記

山本進一郎

昨年と同じ七月三日、作東文化協会の視察研修旅行が会員十八名の参加を得て実施された。天気予報は悪かったが、雨は降らず、熱くなくて絶好の行楽日和であった。

初めに播州赤穂へ。上月から千種川を下った河口が赤穂市街。ガイドの案内で赤穂城趾に到着する。城は加里屋川の三角州に建てられた平城で広大な敷地を有する。初めに当時としては珍しい上水道の遺跡を見る。城の外千種川の上流から水道管を敷設して城内へ清水を引き入れていた。一六一六年に完成したという。

次に大石良雄宅跡の長屋門を見て、大石神社に参拝する。門前の参道には四十七義士の像が両側に配されている。神社内には「義士木像館」があり、浅野内匠頭長矩をはじめ大石内蔵之助良雄など四十七義士の木像が展示されていた。木像はその人の得意なことや特徴を思い出される像に仕上がっており、とてもすばらしくまた興味深いものであった。

本丸庭園には板張りの本丸が作られており部屋の名前も表示されて城の様子がしのばれるようになっていた。天主台の跡は一段と高い石垣の上に築かれており、赤穂の町が一望できた。

午後は備前市日生の加子浦歴史文化館を訪問。この館は、日生の歴史や産業をテーマごとに展示した資料館と、備前市出身の正宗白鳥、柴田錬三郎、藤原審爾、里村欣三などの作家や作曲家岡千秋のコーナーもあった。

次に、特別史跡旧閑谷学校を訪問する。十八名の訪問者に三名のガイドがついてくれた。閑谷学校は以前何回か見学している。国宝の講堂を使って茶会をしたこともあるが、詳しい説明を受けたことはなく、専門の方に説明していただくことがいかに大切かを痛感した。これは私一人の感想ではなく、参加の皆さんが異口同音に話された。これからの視察研修には地元の専門ガイドをお願いしなくてはならない大切なことだと思った。

閑谷学校は二〇一五年四月に「近世日本の教育遺産群」として最初の

日本遺産に認定されています。三〇〇年を経てもびくともしない建物群、石塀など郷土の誇りと再認識しました。

作東文化協会の視察研修旅行は県内を見直そうと、次回は備前長船刀剣博物館などを計画されています。

多くの方の参加をお願いします。

学習室にて
石の炉に炭の火炎の残りおり
国宝講堂にて
講堂の床に青葉の影ゆれる

鷺神社・亥の子について

加藤芳英
春名倫子

私が古い時代に関心を持ちはじめたのは、杉原部落にクリーンセンター建設の話がもちあがり、弥生の時代には珍しい墳丘墓が発掘され見学に訪れたりしているうちに、古代の歴史に関心を寄せるようになりました。

幸いにも作東地域には、平成十五年から発足されたという「歴史地名研究会」があり、友人の勧めもあって中途から入会させていただき今日に至っています。月一回の例会では、事務局長新田祐之氏を中心に「温故而知新」をモットーに過去のことがらを研究し、そして現在～未来へとのつながりを見出すようにする努力をしています。今回は加藤氏病気療養中のため、美作地域の方々に関心をもっていただけそうな「鷺神社」と「亥の子」について研修会の記憶をたどりながらまとめさせていただきました。

鷺神社（鷺の森神社とも称す）

加藤芳英

祭神大巳貴神（大国主）及び少彦名命。

湯郷温泉から西南約二キロの位田の宮山に社殿がある。明治二十二年、入田、中山、湯郷、位田、金屎（昭和四十一年金原に改名）稲穂、奥大谷、下大谷、長内、則平、殿所、北坂、青木の十三村が集まり「湯郷村」となった。「美作国神社資料」（大正九年）によれば、勧請の年は不詳であるが孝徳天皇の大化元年（六四五）己に塩湯郷の名称が見え勧請されて

久しいとみえる。聖武天皇の天平十年（七三八）に社殿が造営されたとある。当時の氏子数（二百二十三）。

『合併記念・勝田郡誌』（昭和三十三年発行）によれば往古この森から白鷺が飛び出し沢田にたたずむのを村人が見つけて行けばこんこんとして温泉が湧出していた。そこより西南十五町の森に社殿をたてて「鷺の森明神」と称した。

天平十二年国主阿部帯磨呂の奏請によって社殿を造営し、勅命によって位田六町と封戸十二戸を賜っている。（天正十二年は聖武天皇、西暦七百四十年）

後年大永年間（千五百二十一～二千五百二十八）、三星城主後藤基兼が明見に築城するや鷺神社を「城域鎮護神」とし、塩湯郷の一の宮として社殿造営、神田も付して崇敬した。

しかし三星城落城後は戦乱の巷と化した。位田神田は、地方豪族による侵略で、社記宝物など行方知れずとなる。

今日、もっとも流布する話は、延暦寺の高僧円仁法師が四国巡礼の際（千八百六十）、一羽の白鷺が脚の傷を癒しているのを発見して鷺の湯と名づけたのが湯郷温泉の起こりとされる（『岡山の温泉』岡山文庫）。だが寛政三年（千七百九十一）部落は大火にあい、この温泉にまつわる古文書の多くは焼失してしまったとある。

○応神のころ「秦」や「勝部」が田を開き上代「吉備国」の土台を造

生花　樽井清甫

る

○仁徳と黒媛のころ財田氏が県の主に派遣されしか

○発掘せし「たたら跡」なる金屎は焦げて赤々千四百年後も

亥の子について

春名倫子

「亥の子」は陰暦十月の亥の日の亥の刻に、餅を食し無病のまじないとする中国の俗信に基づいて、平安期（寛平以前）以来行われた風習。朝廷では内蔵寮から猪子形に作った亥の子餅を献上する儀式があり、次第に民間にもこの日を祝う風習が行われるようになり、収穫後の祭日として特に西日本で盛んであった。この祭りは中部地方の一部にも分布が及んでいるが関東・東北地方には全く見られず、かわりに十月十日に行う十日夜がこれに相当するようである。

ことに美作東部の英田・勝田・久米郡は亥の子信仰が強く、旧暦十月に亥の子の日が二度あれば初めの亥の日に亥の子祭りをする。亥の子石（丸い石）を縄でからんで子ども等が組を作り御幣を切って木につけ、頭の子どもが持ち提灯をさげ夜に家々のカド先の地面を唱えごとをして搗きながら回る。地面を打つ時の共通したことばは、「亥の子、亥の子、亥の子のようさ、餅をつかん者は鬼を生め、蛇を生め、角の生えた子生め」などと歌い、餅、密柑、お金などをもらい集める。もらえば、「上山天王繁盛せえ、繁盛せえ」と祝うが、もらえないと「貧乏せえ、貧乏せえ」とにくまれ口を言うなどと「岡山民族事典」にはある。

柵原町塚角の山頂には「上三宮」がありこの宮は上山牛頭天王、上山神社ともいわれて現在に至っている。特に旧暦十月の亥に日は年中行事の亥の子祭りとして遠近よりの参詣者でにぎわったものであるが、今は次第にさびれてきた。それでも農村の子どもは、いまだ亥の子づきをして、この日に各戸を回り楽しんでいる。

こうした、亥の子、とんど（左義長）、甘酒祭り、など、など年中行事がさびれていくのは、さびしい限りです。地域の絆を深めるためにも、こうした行事をできる限り残していきたいと考えます。

短文芸

生きている
あかしとしての
自分の思いを
自分の言葉で
表現する
その表現が
万人の魂を
ゆり動かす
短文芸の力
伝統文化の力

生花　春名由紀甫

俳句

蓬(よもぎ)摘む

山本真由美

獅子舞に噛まれて泣く子近づく子
エプロンを手籠代りに蓬摘む
飛び去りていつまでもある雉の声
白芙蓉咲きて湯の町閑かなり
秋の野の声の広がる鬼ごっこ

里の四季

堀江二郎

うぐいすの戻りし里のにぎやかに
雲の峰幾山越えて海までも
天の川ながめしままに夜の明けて
寒し夜は妻と楽しく句会する
初日の出輝く妻にただ感謝

生

山本那実

余命知る人の賀状や「生」一字
白梅や女鍛治師の一打二打
啓蟄や週休三日の喫茶店
歳時記に「みどりの日」なしみどりの日
鶏頭の種の小さきよ子規忌なり

鈴の音

春名はるを

峰渡る春風に和す鈴の音
本陣や紫陽花に立つ傘の列
厳島夏の潮寄す能舞台
十六夜の皓皓と雲ほどけゆく
時雨鳴る古代史の謎解き切れず

四季の詩

青山美和子

山寺の古堂に揺れる若葉風
峠道笹百合一本石地蔵
夏草を踏み分け進む古城跡
咲き初むる萩の乱れや石地蔵
もみじ坂杖を頼りの老二人

青田風

井口祥子

畦道を踏みて足裏茅吹くもの
はてしなくおしゃべり続く花蓆（むしろ）
タオルかけ終日動く新樹晴
雨上がり待ってシャッター薔薇（ばら）の花
畦道に足投げ出せば青田風

草の名

沖田はるみ

相伝の正月飾　田神石
初蝶の地を擦る舞や日昏れまで
終日を定家葛の花の雨
野の草の名を確かむる秋灯下
冬月を隠しおほせぬ風の雲

平成の終わり惜む

杉本幸子

初春や三日坊主の日誌書く
玄関の一輪差しの梅の香や
平成の終わり惜むか桜花散る
雨降りて庭の紫陽花鮮やかに
子つばめの巣立ち見守る親つばめ

蛍

高橋ヤエ子

三輪車ぽつんと菜の花畑かな
桃咲いて産衣干される庇かな
話し声ひそめ蛍を待ちわびる
手のひらに残る蛍の匂ひかな
ほうたるの飛び立つ闇の深さかな

書道　神原直子

夏の空

樽井悦子

雨上がり里よりとどく桜餅
牡丹の茅ふくらみそめる軒の下
母なればあれこれ手にし浴衣かな
夏空に流れる星を子等数え
夕焼の空に浮びし天守閣

里の春

豊田絢子

初蝶や野原に光こぼし行く
夕東風や閣を引き連れ荒立ちぬ
夕暮れの里静まりて一夜草
菜の花や和ぎたる朝の野菜畑
満開の桜に席をゆづる空

若葉

春名静山

若葉風入れてデイケア棒体操
若葉山大きく小さく裏返えす
鉄塔の一万ボルト日脚伸ぶ
故郷の昔を今に今日の月
流れ来し車寄り添ふ出水川

一八

坂井はつ子

麦熟れて明るき村となりにけり
母の日に舌噛みさうな花貫ふ
明けやすき東の窓に目覚めけり
一八の墓までの道明らめて
図書館に柚の花の香届き来ぬ

さゝ舟

尾崎千世

百態の露に光れる蜘蛛の網
木犀の香を纏ひ乗る路線バス
元号へ談議始まる柏餅
藤棚を喝采のごと風過ぐる
夏カレー百円ショップの白い皿

夕立

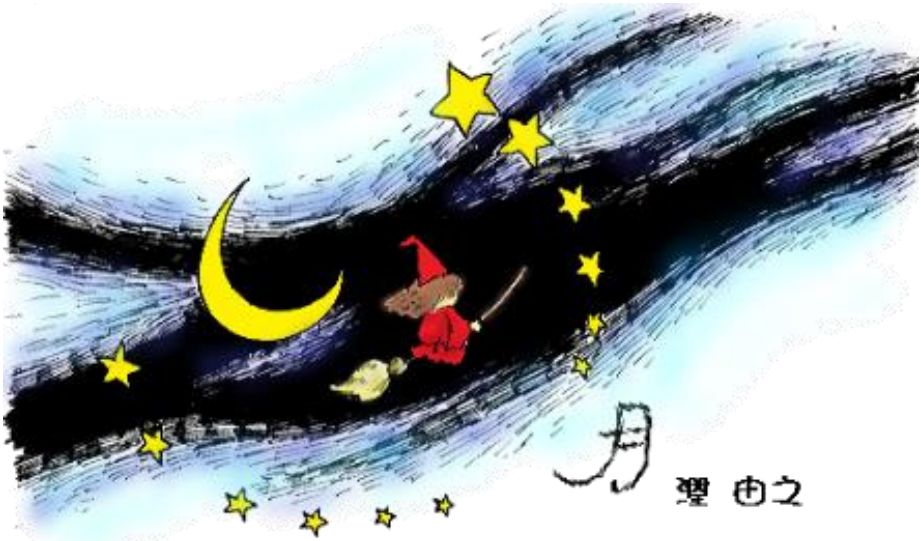
樽井清江

西の空夕立雲わき雨の音
老鶯のひびく鳴き声風に聞く
たらちねの古箱のなかひな眼る
めぐりくる草萌の道散歩道
寒晴や青空高し野の息吹

四季折々

山本靖子

のんびりと寝る猫の背に花吹雪
小雨ふる静けき夜の虫の宿
幸せを祈る笑顔や初鏡
また一軒空き家となりし村の春
梅林に立ちて見る海波静か



月

瑩 由之

空に薄く光るのは
冷たいドライアイスのかけら
雪銷の空に
白くなりきれない煙を浮べて
うす笑いをしている
あれは魔法使い
水色の雲のすき間をぬって
おもしろそうに空をかける
あれは　昔々の夢
今
空に光るうす黄色は
ただの月

詩　鳥形初美

川柳

仕事

春名静山

仕事から戻れば家事が待っている

人生は萍（うきくさ）別れては添いて

実験の子に甦える大古の火

二人三脚婚七十年年迎ふ

悪役もドラマ支える主人公

写真　末 元 正 和

短歌

能登香の里に住みて

名部みどり

もらひ来し光る黒豆は宝物大きく育てよと大地に蒔きゆく

手も足も弱りし力で土寄せすればジャガいもうれしきか土にかくれぬ

散歩道ゆどこを眺めても能登香山我が住む村へ友を呼びたし

米寿を生きて

野澤老梅

宅配の箱を開けば娘らの声があふれく花の香にのり

米寿祝ふと子孫集ひてグラス上ぐ曾孫のもみぢ手は万歳をして

ふたりして「あれよ」「これが」の話にも二人ゐるから会話のある日々

令和となりても

安西　苑

平成が令和となりても変はりなく里を見守る能登香の山よ

落つる日の光の中に柚子の実は濃き金色となりて耀く

一日の仕事を終へて床に就き眼を閉ぢぬ明日を思ひつつ

青葉風

井上さかを

青葉風能登香の山よりそよぎ来て植ゑて浅かる早苗を揺らすも

ふれ合ひの集ひに楽しむ友の芸よ飴玉ころころ口に回しつつ

来る日来る日も晴れの日続きて植ゑ頃の黒豆の移植今日も見送る

令和元年

内藤慶子

令和初の国賓として来日ぜしトランプ氏は天皇皇后と初の会見

五月から令和の始まり何よりも穏やかな日々が続いてほしい

令和さん令和元年になりまして五月一日親に感謝を伝へる

昭和への想ひ

藤本伸子

帰り来る山路に白き百合の花今では貴重なる昭和の花か

何となく心素直になれぬ日よ母を想ひて仏壇を拭く

高校にて親友なりし友も死す想ひ出ばかり浮かびくる今日

年明けて

大内佐智

新春の庭木の被る綿帽子のどかに明けて
若水を汲む

「母さんの歌」口ずさみつつ草を引く生
きゐる事はいろいろあらあなと

道すがら陽だまりに見る黄水仙希望の明
りふくらむ霜の日に

古里を懐ふ

松井洋子

農薬の一切かからぬ茶を摘みぬ父母が使
ひし籠を肩にと

古里は我を育てし所なり遊びを知らぬ父
母に守られて

空き家なれど山椒の実の出荷をす我ら姉
弟力を合はせ

春

坂井はつ子

夜もすがら降りたる雨の上りたり音なく降りし春
の雨かな

はこべらが濯ぎもの干す柱の根に盛り上り来るよ
青青と青青と

万愚節きたれど人のやつて来ず手ぐすねひきて待
ちゐると言ふに

わが望み

宅美とみ子

夫逝きし後のわが身の行方はや残世は如何にや夢を望まな

老いくれど望みを持ちて独り居を楽しみ生きよと友は言ふなり

子に託し肩の荷おろして足腰をのばして生きむがわが望みなり

同級生

中村千州代

寝顔まで笑つてゐたと夫の言ふ同窓会に弾けたる夜は

声聞けばたちまち還る十五歳同級生とふ心の宝

庭に置けと同級生が手作りの椅子とテーブルこの世に一つぞ

幸せ

平瀬芳子

「お父さん今夜は皆でのみましよう」と大吟醸を子等から贈られる

嬉しさに涙ぽろぽろ零れ落つ嫁から贈られし「カーネーション」に

雪降るに家族そろひて初詣われは男孫と女孫の手を引き

宝なる子供

渋谷友香

我家には宝物など無かれども子や孫達の健やかさがあり

その昔憶良の詠みし宝なる子を虐待なす世とはなりけり

国にとり何にもまして宝なる子供の保護は最優先ぞ

日々好日

岡田仍子

茶話会にて人生論に花が咲く歩みて来るあの道この道に

穏やかな日差しを背に受け針を持つ好きな手仕事出来る喜びに

ウォーキングにふと足止めて耳澄ませば川のせせらぎが話しかけ来る

孫達

土井つゆ子

孫達が泊まりに来ればパジャマから柔軟剤の花の香りする

孫達の野球の応援の帰り道に夫が見つけた蕗の薹数多

男孫らが小・中・高校と入学す令和の御世よ平和であれよ

日本画　寺師喜代美

村の宝

有元理嘉子

戦中を共に生き来し十代を語れる友よ少女に化りて

秋日和祭の太鼓の聞え来てコスモス咲く道に人の寄り来る

老いの背にそつと上着をかけやりし隣の媼は村の宝よ

老いてなほ

角利津

ステージに高らかに歌ふ愛の歌夫には言へぬ甘き言の葉

「流浪の民」七十年経て今歌ふ昔の友はいづこにいますや

老いてなお老人ホームの慰問とてコーラスを歌ふドレスはピンク

浜菊

豊田絢子

荒磯のしぶき打ち寄す岩壁に光照りそふ白き浜菊

春きざす野山は土の声受けて動き始めたり光あびつつ

窓により明け立つ時かと眺むれば明るく照るは月映えなりけり

バイアムをかぐ

長澤和枝

こぼれ実に生えつぎ育つバイアムよ母が植ゑしは五昔前よ

かぎとりしバイアム人参揚げとたき朝に供へぬ仏様へと

緑こきバイアムの葉を摘みてをり明朝われの卵つりにと

東京の嫁

中山昌子

新春の恒例となりし歌留多会遂に王位は
嫁に渡りぬ

谷沿ひの細き山道走りゆく「田舎が好き
よ」と東京の娘は

道の辺に猩猩ばかまや菊いちげあちこち
咲きをり危惧されし花が

戌年

小林洋子

運転の鈍きを自覚し五十四年免許更新に
も一度挑まむ

見ておかむ十七年後は見えぬぞも大接近
の戌年の火星

駆足で暮れゆく平成戌の首を引きて待て
待てと言ひたき思ひよ

五体が目覚む

和田眞佐子

移りゆく季をあたふたと過す日の古今集
講座のエアーポケットに和む

童らに民話を語る老い我の細胞ほこほこ
五体が目覚む

野良猫が出掛くるわれを見送りてまたも
留守かと咎むる目をす

狸や躍らむ

山本美枝子

一枚の十円硬貨に見つけたり昭和三十七年の刻印あるを

使はずて廃るる言葉の数々よ代満はたまた麦熟らしなど

山の端を昇り切りたる望月のこの明るさに狸や躍らむ

「生きててよかった」

新田千晶

シンホニーホールは満席にしてステージに楽器手に持ち入場する孫

楽団の一人に加はりバイオリンを演奏する孫眩しく見ゆるも

孫の出るオーケストラの演奏に満たされし我よ「生きててよかった」

改元

黒石初江

子が巣立ち孫が生まれて親が逝き我らは老いゆく平成の時代

新しき元号は何かと落ち着かず皆は黙して発表を待つ

元号の「令」と言ふ字を見し時に「命令」を思ひ達和感を抱く

光

日下智加枝

雀の木となりゐるメタセコイアよりこぼれるやうに野に群れ降りる

大水の水位示して川べりに芥の残るが陽に乾きゆく

さいはひはここに在るよと吾亦紅の円き頭にわづか差す光

春

浜田くに子

たんぽぽと並びて日差しを受けてをり土の汚れが背にある蛙

やはやはと山の地肌を春色に染めゆく若葉を甘雨が濡らす

一面の菜の花畑のその先に若葉をまとひし那岐山が見ゆ

風

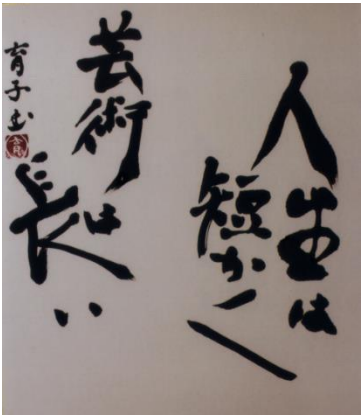
入矢敏江

那岐の嶺を越えくる風か稔り田に吹きひさかたの空の青さよ

窓わくに絵のやうにうつる裏庭を風が通りゆく光を揺らして

川岸に座りて見てをり流れゆく川と水鳥ときどきの風

洋画　遠藤　榮



書道　春名育子

逃げ水

福島美智子

紅梅のにほひ清しき春のゆふ亡き母たつがに木下にをりぬ

逃げ水にゆらめく夫の姿見ゆ草刈り音は近くてとほし

命とふ鎖につながれけふも又良くも悪くも真夏日の中

メガソーラー

木宗玲子

山削り電気を造るは「エコ」なりや環境破壊の愚挙にほか無し

泥水の川を見る度胸詰まる清き流れの戻る日ありや

天皇の植樹祭でのお言葉は「山を守れよ」「木を育てよ」ぞ

孫の香

新田みどり

若夫婦が新居へ移り空きし部屋の障子の破れに孫の香のこる

新車買へば塵ひとつなき車内にて小言が増えぬ孫の乗り降りに

ばね指と医師に言はれて何気なく節樽立ちし母の手よぎる

夫の顔

丘野道子

バレンタイン期待する夫六十六今年も貰ひ笑顔を見せる

見事さに車を降りて紅葉撮る余裕を見せて夫自慢顔

山道に車怖れず群れ遊ぶ子鹿を見しと我に言ふ夫

育てて育つ

山下照夫

長野を発ち我家に来りて貳拾年大きく育つ水芭蕉なり

軒下で我が物顔に三番ひも子育てレースの真最中ぞ

早産の心配無用予定日にひよつこり生まれすくすく育つ

負けるな

杉本幸子

吾が躰マヒに敗けるな強くなれ動かぬ手足必ず動くに

緑蔭に車椅子止め懐かしき景色眺めてしばし動かず

ちぎり絵　祐延佳代子

螢

佐々木美奈子

風上りなたね箒を兄と持ち螢の光を追ひし夜かな

田上りに皆集ひし公会堂螢祭のにぎはひ多し

裏山にわづかなる光見えし夜孫と一緒に上げし歓声

思ひのままに

須田紀秋

夕月夜塩垂山の不如帰啼きつつ通ふ冥府と現世を

かきいかきしべはるかつをばぐくめちがいたしかなるいのちを　（かきつばたを詠み込む）

赫々と燃ゆる想ひの灯を点し螢飛べ飛べ夜は短し

春　こ　そ

春名倫子

春あけてひさびさに筆とる半切に心おだやか冬陽しみいる

春暁に「心の時代」ききをれば人それぞれの「生」のかなしき

咲きそめし梅の一輪手折りきてこたへなき子に春を告げたり

初夏

三浦智江子

萌黄なる霧かと見えてわかば萌ゆ欅並木
を仰ぐこの道

隣家より垣をくぐり来したかんなは伸び
に伸びたり親をしのぎて

どの段に小さき姫をはぐくむやこのさみ
どりの若竹の節(ふし)は

令和の御世こそ

岡内　悟

今月の空を仰ぎて今の年も気を和らげむ
と裡を撫でをり

新元号「令和」を祝ぐがに吾が村の山々
萌ゆるか眩しきまでに

なだらなる山の囲める吉備のくに令和の
世にし幸はひあらさな

グループ紹介

	場所	展示会等	作東文化協会会員			作東文化協会未加入者	合計
			作東地区内	作東地区外	子ども（中学生以下）		
	作東公民館江見教室 美作アルコ林野教室	白雲書道会展（作東美術館）	12	15			27
	川崎教室		2		25		27
	月曜日：高本公民館 木曜日：角南公会堂 金曜日：西町コミュニティ		7	1	22		30
	講師自宅		2	3	12		17
	作東農村環境改善センター	春の絵画展（作東美術館）	7	3		3	13
	作東農村環境改善センター	春の絵画展（作東美術館）	5	5			10
	教室（華）		5	3			8
	JA勝英土居支所		3				3
	―	―	3				3
	JA作東支店大会議室		4	2			6
	地区センター（吉野）	吉野きんちゃい館、吉野郵便局	11	1			12
	作東公民館		5	1			6
	福山多目的集会所	山の学校	7			1	8
	作東公民館		8				8
	作東公民館	お月見会・初釜	6	1			7
	作東農村環境改善センター大研修室	プラザ展示（10月、3月）	14	20			34
	粟井教育集会所	プラザ展示（10月、3月）	8				8
	福山山の学校 研修室他		11			1	12
	作東公民館		10				10

作東文化協会

部名		グループ名	種別	代表者氏名	指導者氏名	例会	
書道部	1	白雲書道会	書道	北村　福作	山本　千代子	月2～3回	
	2	阿部書道会	書道	真野　みよ子	真野　みよ子	月4回	
	3	書　　春名	書道	春名　直子	春名　直子	月3回	
	4	玲華書道教室	書道	末宗　玲子	末宗　玲子	月3回	
絵画部	5	作東水彩画教室	水彩画	妹尾　美智子	竹中　信清	月3回	
	6	作東油彩画教室	油彩画	妹尾　美智子	竹中　信清	月3回	
	7	さつき会	日本画	寺師　喜代美	井上　美智江	月2回	
	8	土居すみ絵	水墨画	小林　艶子	岩本　敏子	月2回	
	9	すみれ会	絵手紙	岩本　敏子	岩本　敏子	月2回	
	10	こぶしの会	水彩画 油彩画	田中　佳栄子	権田　直良	月2回	
	11	吉野ひめっ子クラブ	絵手紙	小坂田　千恵美	—	月1回	
	12	江見ちぎり絵教室	ちぎり絵	唐内　治美	杉本　幸子	月1回	
	13	福山ちぎり絵教室	ちぎり絵	下山　美好	杉本　幸子	月1回	
茶華道部	14	ひまわりの会	華道	中田　敏子	中田　敏甫	月2回	
	15	茶の湯同好会	茶道	谷本　津多江	谷本　津多江	月2回	
文芸部	16	あがた川短歌会	短歌	横山　猛	関内　惇	月1回	
	17	能登香短歌会	短歌	松井　洋子	関内　惇	月1回	
	18	山家川俳句会	俳句	春名　貞和	春名　はるを	月最終土1回	
	19	作東川柳同好会	川柳	福嶋　完治	—	2ヶ月に1回	

グループ紹介

	場所	展示会等	作東文化協会会員			作東文化協会未加入者	合計
			作東地区内	作東地区外	子ども（中学生以下）		
	作東公民館		7	6			13
	作東総合支所会議室		5	2			7
	写真のこだま店内（撮影現場）		10	2			12
	吉野公民館		5	5			10
	JA勝英作東支店	岡山県大会（10月）、作東文化協会芸能発表会（3月）	4	5			9
	―		22		1		23
	作東公民館		12	1			13
	作東公民館		5	10			15
	旧粟井小学校音楽教室		5			2	7
	原公民館・白水公民館		5				5
	作東老人福祉センター		21			48	69
	旧粟井小学校		6	2			8
	作東公民館		7	3			10
	作東公民館	青葉祭、節分祭、宝妙寺	13	9			22
			257人	100人	60人	55人	472人

作東文化協会

部名		グループ名	種別	代表者氏名	指導者氏名	例会	
歴史部	20	作東歴史地名研究会	地名研究	新田　祐之	会員相互研修	月1回	
	21	古文書を読む会	古文書	真野　みよ子	グループ内交替制	月1回	
写真部	22	写真同好会　写友	写真	小坂田　貢	小玉　司	年1～2回	
芸能部	23	吉野ハピネス	大正琴	小林　珠枝	富永　仁美	月2回	
	24	JA勝英あずさの会	大正琴	岩本　敏子	藤谷　　守	月1回	
	25	作東吟詠愛好会	吟詠	光辻　猛美	江見　悟	月2回	
	26	コール作東	コーラス	春名　みどり	池田　直美	月2回	
カラオケ部	27	作東音楽同好会	カラオケ	島　　民子	土屋　博司	月4回	
	28	粟井カラオケ同好会	カラオケ	松本　満寿子	—	月2回	
工芸部	29	むつみ会	ちぎり絵外	山本　津多江	山本　津多江	月3回	
棋道部	30	双山囲碁クラブ	囲碁	横山　廣志	横山　廣志	年2回	
情報映像部	31	お達者ねっと倶楽部	インターネット	鳥形　初美	—	月2回	
手芸部	32	ビーズを楽しむ会	手芸	野村　啓子	西坂　暁子	月1回	
	33	手芸編物教室	手芸	原田　豊子	原田　豊子 野村　啓子	月4回	

平成30年度　作東文化協会事業報告

【支　部　活　動】

部　名	年	月	日	内　　容
江見・豊野支部	30	5	29	江見・豊野支部合同評議員会の開催、チラシ配付と会員募集
		10	3～10	第４４号「作東の文化」文化誌の会員配付
土居支部	30	6	5	支部評議員会(会員募集・決算報告)
		10	5	支部評議員会(文化誌の配布)
福山支部	30	4	9	福山支部評議員会
	31	1	14	福山支部評議員会
粟井支部	30	6	5	第1回評議員会
		10	10	第2回評議員会
		11	17	研修旅行（姫路方面）
吉野支部	30	6	19	評議委員会
		10	1	評議委員会
		11	13	視察研修旅行(香美・浜坂の旅)

平成30年度　美作市文化連盟事業報告

【連　盟　事　業】

年	月	日	事　業　名	内　　容
30	4	1	日本舞踊連盟第9回発表会	美作文化センター
	4	15	美作市カラオケ連盟第7回発表会	美作文化センター
	6	6	美作市文化連盟第1回運営委員会(総会)	作東総合支所応接会議室
	6	30	美作市囲碁連盟第22回美作市囲碁大会	作東農村環境改善センター
	7	1	美作市文化連盟第11回芸能発表会	東粟倉基幹集落センター
	11	11	美作市吟剣詩舞道連盟第12回発表会	かつた市民センター
		17	美作市囲碁連盟第23回美作市囲碁大会	作東農村環境改善センター
		25	美作市カラオケ連盟第8回発表会	作東バレンタインプラザ
31	1	25～31	美作市文化連盟洋画部展示	美作市立作東文化芸術センター美術館
	3	9	美作市囲碁連盟囲碁大会	作東農村環境改善センター

平成30年度　作東文化協会事業報告

【全　体　事　業】

年	月	日	事　業　名	内　　容
30	4	20	第1回理事会	年間事業計画・会員募集・文化誌「作東の文化」(第44号)発刊・視察研修について
	5	10	第1回文化誌編集委員会	編集委員長の選任、編集の基本方針・編集内容・原稿募集・編集日程について
	5	18	第2回理事会	会員募集・文化誌「作東の文化」(第44号)・視察研修・専門部グループ調査について
	5	18		会員募集開始
	7	3	研修旅行	矢掛方面 【旧矢掛本陣・井原田中美術館・小田原県庁跡・笠岡市立郷土館】
	7	31		会員募集〆切、グループ調査〆切
	8	3	第2回文化誌編集委員会	応募原稿の確認仕分作業・原稿応募数について
	8	17	第3回文化誌編集委員会	応募原稿の校正作業
	9	7		秋の文化展展示希望調査提出〆切
	10	1	第3回理事会	文化誌「作東の文化」(第44号)の配布・活動費の受渡し・秋の文化展について
	10	26	秋の文化展準備	
	10	27～28	秋の文化展・片付け	作品展示(B&G海洋センター)
31	1	18	第4回理事会	春の文化展について、芸能発表会について
	2	8		支部・専門部活動報告と計画提出〆切日 美作市文化連盟作品展示希望調査〆切日
	3	1	第5回理事会	総会提出案件について
	3	22	春の文化展準備	春の文化展準備・芸能発表会準備補助
	3	23～24	春の文化展・片付け	作品展示(美作市立作東文化芸術センター美術館・作東農村環境改善センター大研修室・作東バレンタインプラザ東側スペース)
			【同時開催】第14回芸能発表会	【同時開催】第14回芸能発表会　23日リハーサル・24日本番(作東バレンタインプラザ)
	3	24	平成30年度 作東文化協会総会	(作東バレンタインプラザ)

平成30年度　作東文化協会事業報告

【専門部活動・2】

部　名	グループ名	年	月	日	内　　容
絵画部	吉野ひめっ子クラブ	（定例）			月の最終土曜日吉野きんちゃい館、吉野郵便局で随時展示
		30	4	3	お花見、津山おひな祭り見学会
			5		絵手紙用道具買い物ツアー
			12		反省会、忘年会
		31	1		新年会
			3	5	絵手紙見学会（ひな祭りを描く）
	江見ちぎり絵教室	（定例）			月1回開催(4月・6月・8月・9月・10月・11月・2月・3月)
		30	5		江見ちぎり絵教室合同研修会（宝塚）
			12		江見・福山ちぎり絵教室合同親睦会（山の学校）
	福山ちぎり絵教室	（定例）			福山ちぎり絵教室開催(月1回)、山の学校展示(月1回)
		30	5		江見・福山合同研修旅行
			12		江見・福山合同交流会
茶華道部	ひまわりの会	（定例）			月2回開催(作東公民館)
	茶の湯同好会	（定例）			月2回開催
		30	9	28	お月見茶会
		31	1	11	初釜
文芸部	英北短歌教室	（定例）			短歌会開催(毎月1回)
		30	4	12	第7回文芸愛の小径　短歌大会(年1回)
	能登香短歌会	（定例）			月1回定例詠草会開催(第4金曜日)
	吉野短歌会	（定例）			短歌講座月1回開催(第1金曜日)※8月のみ台風のため休講
	山家川俳句会	（定例）			月1回開催(最終土曜日)
	作東川柳同好会	（定例）			偶数月例会開催　作品の発表と内容検討
歴史部	歴史地名研究会	（定例）			月1回定例研究会開催(原則第4火曜日)
	古文書を読む会	（定例）			月1回開催(第3金曜日13：30～15：30)作東農村環境改善センター会議室
写真部	写真同好会写友	30	4		大山、蒜山（西芽部）桜
			7		滝めぐり　奈義町　屋敷の滝、布滝
			8	1～31	バレンタインプラザ展示
		31	1		年間計画、春の文化展について打合せ
芸能部	吉野ハピネス	（定例）			月2回開催　親睦と大正琴練習
		30	7	1	美作市文化連盟第11回芸能発表会出演
		31	3	24	第14回作東文化協会芸能発表会出演予定
	琴伝流大正琴あずさの会	（定例）			月1回開催(第2木曜日)
		30	9		福山ふれあい演奏会参加
			11		豊野　園　慰問
			12		兵庫県大会　演奏会参加
		31	3		ＪＡ勝英女性部文化発表会おさらい会参加

平成30年度　作東文化協会事業報告

【専門部活動・1】

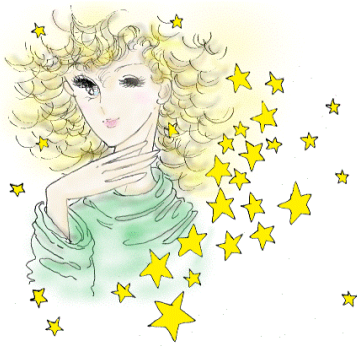
部　名	グループ名	年	月	日	内　　容
書道部	白雲書道会	（定例）			江見教室（作東公民館）月1～2回開催
					林野教室（美作アルコ）月2～3回開催
		30	9	7～9	白雲書道会（美作市立作東文化芸術センター美術館）
	阿部書道会	（定例）			月4回開催　川崎教室
	書　春名	（定例）			月3回開催（月曜・木曜・金曜）　高本公民館、角南公会堂、西町コミュニティ
	玲華書道教室	（定例）			月3回開催　書道教室
絵画部	作東水彩画教室	（定例）			月1回開催
		30	4/30～5/6		春の絵画展（美作市立作東文化芸術センター美術館）
		31	1	25～31	美作市洋画連盟作品展出品
			2	14～19	湯郷を描く展覧会出品（湯郷地域交流センター）
			3	13～17	第2回奈・央・美会絵画作品展出品（奈義町現代美術館南棟（町民）ギャラリー）
	作東油彩画教室	（定例）			月2回開催
		30	4/30～5/6		春の絵画展（美作市立作東文化芸術センター美術館）
			9	5～9	県展出品
			10/26～11/4		しんわ美術展出品（津山市立文化展示ホールアルネ津山4階）
		31	1	25～31	美作市洋画連盟作品展出品
			2	14～19	バレンタイン愛の美術展出品（美作市立作東文化芸術センター美術館） 湯郷を描く展覧会出品（湯郷地域交流センター）
			3	13～17	第2回奈・央・美会絵画作品展出品（奈義町現代美術館南棟（町民）ギャラリー）
	さつき会	（定例）			月2回開催
		31	1	11	天満屋院展見学
	土居すみ絵（水墨画）	（定例）			月1回開催
	すみれ会（絵手紙）	（定例）			月1回開催（第3火曜日）
	こぶしの会	（定例学習会）			月1～2回開催
		30	4		写生会（作東バレンタインの桜を描く）
			5		県北展出展
			6		萩原教室グループ展（鑑賞）
			9	5～9	県展作品鑑賞（津山市）
			10		秋の風景写生（美作市）

会員の方は本誌でご確認ください。

平成30年度　作東文化協会事業報告

【専門部活動・3】

部　名	グループ名	年	月	日	内　　容
芸能部	作東吟詠愛好会	（定例）			各支部（地区）月2回開催
		30	4	8	紫州流総本部総会（ニュー大阪ホテル）
			4	22	岡山本部春季錬成大会（作東バレンタインプラザ）
			9	2	岡山本部昇段大会（作東バレンタインプラザ）
			10	30	紫州流岡山本部女性部慰問（作東老健）
			11	11	美作市吟剣詩舞道大会（かつた市民センター）
	コール作東	（定例）			月2回開催（4月お休み、5～1月は月2回、2・3月は月3回）
	（全体）	30	4	6	第1回芸能部役員会
			12	7	第2回芸能部役員会
		31	1	16	第3回芸能部役員会
			3	23	第14回芸能発表会リハーサル（作東バレンタインプラザ）
			3	24	第14回芸能発表会（作東バレンタインプラザ）
カラオケ部	作東音楽同好会	（定例）			月曜日　月4回開催
					水曜日　月4回開催
					木曜日　月4回開催
		30	4	15	美作市カラオケ連盟発表会出演
			11	25	美作市カラオケ連盟発表会出演
	栗井カラオケ同好会	（定例）			月2回（4月・5月・6月・7月・8月・9月・10月・11月・3月）
工芸部	むつみ会	（定例）			月3回開催（原公民館）
棋道部	双山囲碁クラブ	―			子ども囲碁教室講師派遣（月3回）
		30	8	25	第132回双山囲碁大会
		31	1	26	第133回双山囲碁大会
情報映像部	お達者ねっと 倶楽部	（定例）			月2回開催 パソコン・インターネット講習会（旧栗井小学校）
手芸部	ビーズを楽しむ会	（定例）			月1回開催（8月・12月はお休み）
	手芸編物教室	（定例）			月4～5回開催



作東文化協会会則

（名　称）
第一条　本会は作東文化協会と称する。
（目　的）
第二条　本会は作東の文化生活の向上を期すると共に、会員相互の親睦を図ることを目的とする。
（事務所）
第三条　本会の事務所は美作市教育委員会作東分室内におく。
（事　業）
第四条　本会は第2条の目的を達成するために次の事業を行う。
一　講演会・研修会・展覧会等の開催。
二　文化誌などの発行。
三　その他文化の推進に関する事業。
（会　員）
第五条　第二条の趣旨に賛同し本会の事業を推進する個人を会員とする。
（組　織）
第六条　本会に部及び支部をつくることができる。
一　部は、書道・絵画・園芸・茶華道・文芸・歴史・写真・工芸・芸能・カラオケ・棋道・情報映像・手芸とする。
二　支部は、江見・豊野・土居・福山・粟井・吉野とする。
（役　員）
第七条　本会に次の役員をおく。
会長　一名、　副会長　二名、　理事、部長、副部長、支部長、評議員　若干名、幹事　二名
（役員の任務）
第八条　会長は会を代表し会務を統括する。
二　副会長は会長を補佐し会長に支障があった場合は会務を代行する。
三　理事は会をつかさどる。
四　部長は部を統括し副部長は部長を補佐する。
五　支部長は会務をつかさどり支部の振興を図る。
六　評議員は運営について協議する。
七　監事は会計を管理する。
（役員の選出）
第九条　会長・副会長は理事会で選出し総会で承認を受ける。
二　幹事は総会において選出する。
三　理事は部長・副部長・支部長をもってあてる。
四　部長・副部長は部で、支部長は支部において選任する。
五　評議員は部長・副部長・支部長が推薦し理事会において選任することができる。
六　任期中途の補充役員は理事会において選任することができる。

（事務局担当者）
第十条　事務局担当者は会長が委嘱する。
（役員の任期）
第十一条　役員の任期は二年とする。ただし再選を妨げない。
二　任期中の補充役員の任期は前者の残任期間とする。
（顧問及び参与）
第十二条　本会に特別顧問・顧問及び参与をおくことができる。特別顧問・顧問及び参与は総会の同意をえて会長が委嘱する。
（会　議）
第十三条　総会は毎年一回開催することができる。但し必要に応じて会長は理事会の承認を得て臨時総会を開催することができる。
二　評議員会を以って総会に代えることができる。
三　理事会は年四回開催する。但し必要に応じて臨時理事会を開催することができる。
（経　費）
第十四条　本会の経費は会費・補助金・市よりの事業委託料・その他をもってあてる。
二　会員は年額一口一，〇〇〇円の会費を納入するものとする。
（会計年度）
第十五条　本会の会計年度は毎年四月一日に始まり三月三十一日をもって終わる。

（会則の改正）
第十六条　この会則は、総会の決議により改正することができる。
（付　則）
一　この会則は昭和六十三年四月一日より施行する。
二　平成十年三月二十九日会則一部改正　平成十年四月一日より施行する。
三　平成十一年三月二十一日会則一部改正　平成十一年四月一日より施行する。
四　平成十四年三月二十四日会則一部改正　平成十四年四月一日より施行する。
五　平成十七年三月二十一日会則一部改正　平成十七年四月一日より施行する。
六　平成二十年三月二十八日会則一部改正　平成二十年四月一日より施行する。
七　平成二十一年三月二十二日会則一部改正　平成二十一年四月一日より施行する。
八　平成二十八年三月二十七日会則一部改正　平成二十八年四月一日より施行する。

作東文化協会会員・役員名簿

令和元年七月末現在

会員の方は本誌でご確認ください。

会員の方は本誌でご確認ください。

会員の方は本誌でご確認ください。

会員の方は本誌でご確認ください。

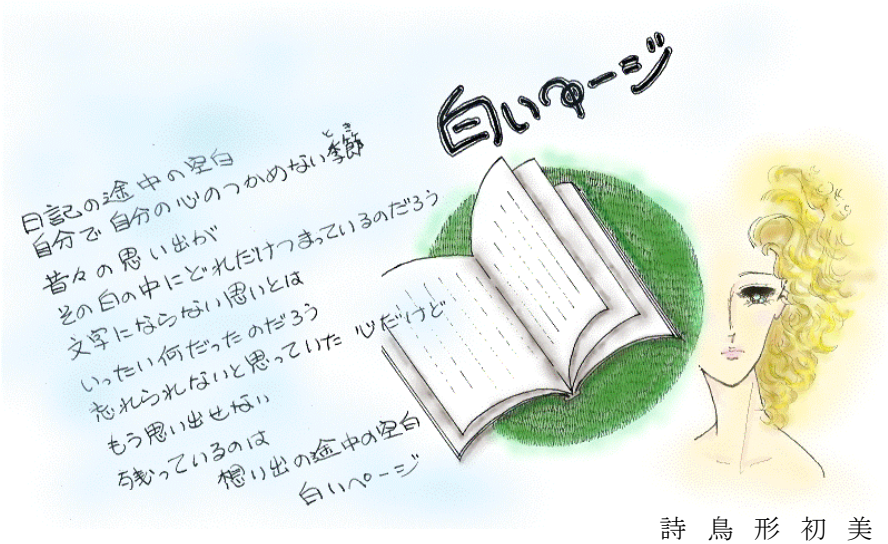
会員の方は本誌でご確認ください。

会員の方は本誌でご確認ください。

会員の方は本誌でご確認ください。

会員の方は本誌でご確認ください。

会員の方は本誌でご確認ください。



詩　鳥　形　初　美

会員の方は本誌でご確認ください。

編集後記

今年はオールカラーの「作東の文化」をお届けすることができました。今まで以上に真剣な編集作業に取り組み、昨年まで印刷会社に頼っていた部分を編集委員で担い、できるだけ従来のレイアウトを守りつつカラー化を試みました。まだまだ未熟な出来栄えですが、モノクロでは伝えきれなかった作品の良さを感じていただけたのではないでしょうか。

色彩が可視化されることで、よりリアルなものとして伝わって来ます。「作東の文化」に掲載している写真画像がカラーになればいいのに…との声は、実際に見えていたままの景色を見てほしい、見せてほしいということだったのでしょう。

スマートフォンやデジカメが普及するようになって、誰でも簡単にカラー写真を見ることができるようになり「写真はカラー」が当たり前になりました。最近では、過去に撮影された白黒写真や映像をカラー化する技術もテレビで取り上げられています。ＡＩなどの発達によって、白黒画像を簡単にカラー化するウェブサービスが公開されたり、アプリができたというニュースもあります。近い将来、私たちの手元にある古い白黒写真や、地元に残る歴史的な過去の画像から、知らなかった昔を色によって実感できるようになるかもしれません。

「作東の文化」はオールカラーになったとはいえ、掲載されている作品は文字で表現されたものがほとんどです。文化誌として読者の想像によるカラー化という感覚も残しながら、文章から感じる色と画像のリアルな色の両方で楽しんでいただける作品集になればいいなと思います。

そして誌面をカラーにすることで、絵や写真作品だけでなく、いろいろなジャンルの作品を発表

する場、活動を紹介する場にもなるでしょう。それが作東文化協会の活動に賛同してくださる方、参加してくださる方を増やし、より活発な文化活動につながっていくことを期待したいと思います。

最後に、今回の文化誌制作にあたり、ご協力いただいたみなさまに感謝を申し上げます。ありがとうございました。

編集委員会

作東の文化

第45号

令和元年10月1日発行

編集　作東文化協会文化誌編集委員会
（美作市教育委員会社会教育課）

編集委員　鳥形 初美　小玉 司　小林 昭文
谷口 重人　中田 敏子　新田 祐之
松本 俊明　真野 みよ子　春名 貞和
山本 進一郎　山本 文子

発行所　作東文化協会
岡山県美作市教育委員会　社会教育課
〒709-4234 岡山県美作市江見945
TEL(0868)72-2900
HPアドレス http://bunka.boo.jp/

印刷所　株式会社 廣陽本社
〒708-0052 岡山県津山市田町22
TEL(0868)22-7221